２９．下岡　純一郎氏（株式会社クアンド　代表取締役 CEO）

「予測ができない未来の中で、課題先進都市として変化を受け入れつつ、解決していくまちへ。」

下岡　純一郎（しもおか　じゅんいちろう）
北九州市出身。
小中高時代はバスケットボールに打ち込み、大学進学を機に福岡市内へ。大学院進学では京都、就職では関西へと移り住み、社会人 2 年目のときにイタリアへ赴任。グローバルプロジェクトで経験を積み、帰国。その後、北九州市で『株式会社クアンド』を起業した。自社開発の『SynQ Remote』は、日本、そして世界の製造現場、建設現場で活用されている。

「育まれた技術、アントレプレナーシップ」

長い時間軸でみると、北九州市が現在のような都市になったことには蓋然性があると思っています。水が豊富で、炭田が近いという地政学的理由から産業が生まれ、高炉の稼働に合わせて 24 時間労働し、それに呼応する形で飲食店などができ、眠らないまちになったという大きな時代の流れに基づいてまちができています。

北九州市の誇る㈱安川電機も鉱山を掘るためのモーターの事業から始まりましたが、その時代ごとの世の中の流れや課題を汲んで産業が生まれ、それらに合わせた技術やアントレプレナーシップが育まれていったと考えます。北九州市は高齢化・人口減少等でネガティブに言われていますが、その課題を解決するために色々な知識や施策が打たれています。課題をネガティブに捉えるのではなく、次世代の事業の種だと捉え、それを新しい産業の推進力に変えていくことが重要だと思っています。

「再び生まれ変われるポテンシャル」

ポスト資本主義の中ではお金がお金を生む一方で、社会や地球が壊されるということが起こっており、「誰が幸せなのだろう」という疑問を皆が持ちつつあります。そのような中で、北九州市こそが次の時代を牽引していく立場なのではないでしょうか。世の中を変えるビックチェンジを経験してきた北九州市は再び生まれ変わることができると考えています。

文化についても、福岡市はミニ東京のようになっているように感じていますが、北九州市はその方向を目指すべきではないと思います。チェーン店が少ないなど、東京っぽくなく地元に根付いた文化があるのは面白い特徴です。その他に東京との違いということでは、産官学が近いということ、地元企業や行政、大学など、立場や領域が異なる人々が越境して繋がり、一緒に企画を立ち上げても、きちんとモノになるといった顔が見えるコミュニティや関係性が北九州市にはあるということです。そこに影響を及ぼし、自分たちでつくっていける楽しいまちだと思います。

私が事業を始めるにあたって北九州市を選んだのも、主流に乗るのではなく、磨けば輝きそうなポテンシャルがある場所が良い、という考えがあったからです。

「空港の活用を」

さらなる北九州市のポテンシャルを磨くためには空港をもっと活用した方が良いと思います。福岡空港は住居エリアが近く、利用時間に制限がある中で、北九州空港は 24 時間使えるという強みをもっと生かしていくべきです。

「ビジョンづくりはブランディングと同じ」

ビジョンづくりはブランディングとも通じるもので、すなわち、北九州市と聞いてどんなイメージが浮かぶか、浮かんで欲しいかを考えることでしょう。人が考えられるキャパシティには限りがあるので、あれもこれもとイメージを詰め込むのではなく、「北九州市」と聞いたときに浮かぶブランドが必要なのではないでしょうか。

「課題先進地の技術で、世界の課題を解決したい」

当社で提供しているサービスは、現場の労働力不足を補完するものです。建設業における人手不足は起きるべくして起きた問題だと認識しています。人口が縮小していくと建設業は人気がなくなっていく傾向にあり、建物の仕事は減っておらず、仕事が増えていく状態にあります。現在は高齢の労働者達が耐えて何とか現場が回っている状況です。これは先進国に共通している典型的な課題であり、これからはアジアなど各国で起こってくる課題と捉えています。現場のオペレーションやきめ細かさといった日本の建設業の強みを生かし、日本人が日本にいながらにして、他国の建築の監理をすることができるようになれば良いと考えています。

「社会で役に立つ教育を」

教育について、どういう人が育つかが、どういう都市になるかを決めると考えており、教育は地域にとっても非常に重要だと思っています。これまでのように「一つの正解を見つける」教育ではなく、「自分らしい答え」を子ども達が自ら見つけ、自分たちの未来を変えていけるような教育が必要です。お金・IT・ダイバーシティの教育など、社会で重要となる教育を実施する場があると良いと思います。

「クアンド」という社名の由来は映画監督が撮影を始めるときに放つ「キュー（Q）」の語源であるラテン語「quando」で、「時」「物事」の始まりを知らせる合図という意味があります。人間の能力は個々人で大差はありませんが、自分が持っている能力に気づかせてくれるきっかけがあるかないかで人生が変わってくると考えています。そういうきっかけになる会社にしていきたいと思っています。

その人の人生を変える「アッ」というものがあるはずです。教育でも同様のことが言えるのではないでしょうか。マイルストーンを置いていくのではなく、偶発的なものから大きな変化が起きることを踏まえ、そういう気づけるきっかけを都市の中にいかに散りばめられるかが肝心だと思います。

「偶発的に新しいものが生み出されるきっかけやポテンシャルがあるまち」

北九州市は、偶発的に新しいものが生み出されるきっかけやポテンシャルがあふれるまちです。今の世の中は予測可能性や計画、戦略といったことが当たり前に言われていますが、未来の都市の有り様は予測できないと考えています。未来が読めない中で、北九州市はありのままに変化していくことを受け入れられるまちだと思っています。